

JUSTSAP* 日本協会副会長

黒田 隆二

Takaji Kuroda

Vice President

JUSTSAP Japan



横浜国立大学工学部卒。
1959年にNECに入社。マイクロウエーブ，準
ミリ波，ミリ波通信システムの開発に従事。そ
の後，衛星通信開発部長，宇宙開発事業部長，
支配人，本社理事，主席技師長として一貫して
衛星通信システム，人工衛星システムの開発責
任者として業界をリードする。
日本衛星ビジネス協会会長を務め現在相談役。
宇宙科学振興会常務理事などを歴任。国際宇宙
アカデミー会員，中国宇航学会名誉会員，国際
宇宙大学名誉理事。

ロケットが炎の尾を引きながら人工衛星を積んで飛び立つとき，関係者は長年の苦勞の実る瞬間を目にして緊張と，期待と，不安に包まれる。時にはソットお守りの一片を人工衛星に貼り付けた人がいるかもしれない。

そして，成功すれば当然であったような顔をして誇らしげに胸を撫で下ろし，失敗すれば途端に非難轟々の嵐の中に放り込まれる。まさに天国と地獄である。そこには，宇宙のこと，ロケットのこと，人工衛星のことは100%理解しているという驕りと誤解が交錯している。

直接手に取り，目で見る事が出来ない世界に挑戦する宇宙開発はまさに理論的であらねばならないと同時に最も最先端の経験工学の分野である。欧米と比較して二桁も違う打ち上げ数の差は如何ともしがたい大きな壁であるがこれには目をつぶって，またしても毎回のように「税金の無駄使い」，「00 億円が宇宙の藻屑に」という人目につく言葉だけが新聞紙面に飛び交う。そして予算が削られる。開拓者精神を失ったかのような風潮に乗ったほうが無難だからである。

魚釣りを趣味としている人は多い。見えない水の中の相手との戦いはまさに経験がものをいう。釣れれば，また大釣りをと釣り場に通り，釣れなければ今度こそはと奥方の反対にめげず釣り場に通う。そして，いつのまにかベテランといわれる釣り師に成長する。この自然の行動は示唆に富んでいる。釣り場に通わずにいくら釣り道具を改良し，餌を改良してもそれだけでは魚は釣れるものではない。たまには釣れるかもしれないが，これははっきり言ってまぐれである。次はどうなるかわかったものではない。

一つや二つ成功して、「技術を習得した」と平気で言うのは止めにしたほうがよい。成功すれば「もう一度やってみろ」と予算を増やし、失敗をすれば「もっと打ち上げろ」と予算を増やす。このようなごくあたりまえの経験則が宇宙開発に取り入れられて、わが国の宇宙開発が始めて本物になる時が来るものと期待したい。

* Japan-US Science, Technology and Space Application Program (日米科学・技術・宇宙応用プログラム) <http://www5e.biglobe.ne.jp/~kuroda/justsap.htm>